

明恵上人みょうえ 後立遺跡いかだちに

歌碑が建立されました

明恵上人は一一七三年、紀伊国石垣莊吉原（現在の有田川町歎喜寺区）に生誕した鎌倉時代を代表する高僧の一人です。釈迦しやかを慕い、自ら厳しい修行を実践した仏教改革者であり、優れた歌人としても知られています。

8歳の春に母を、9月に父を失った明恵上人は、亡き母の妹に養われ、9歳の時には母の弟である上覚じょうかくの導きにより京都高雄の神護寺で仏教や学問を学び始めます。16歳で出家した明恵上人は、21歳という若さで宮中の講義を行うことを求められるまでに成長し、将来を嘱望しよくぼうされます。しかし、公的な場に出ることを嫌い、また当時の荒廃した仏教に失望した明恵上人は、世俗を離れて修行するために故郷の有田へと戻りました。

その後、23歳から34歳までの間、京都と故郷を行き来しながら修行修学の日々を過ごしました。これら故郷の修行地7か所と生誕地を加えた8か所の遺跡には、明恵上人の没後に弟子の喜海きかいがその遺徳をしのんで木製の卒そ

塔婆とうばを建立し、その後弁べん遷せんが石造の卒塔婆に改めました。今も7か所に卒塔婆が現存し、「明恵紀州遺跡率都婆」として国の史跡に指定されています。

後立遺跡（有田川町歎喜寺）は、伯父の湯浅宗光の招きによって白上峰（湯浅町栖原すはら）から移り、26歳から約3年間華嚴かげん経の教えを身につけるために修行を重ねた場所です。現在も地元の婦人会の方々によって毎月清掃が行われるなど、今も厚く信仰されています。

歌碑は、明恵上人讃さん仰ぎやう会によって建立されたもので、去る10月22日（土）に約60人が参集し、除幕式が行われました。明恵上人讃仰会は、上人七百遠忌おんきにあたる昭和6年に発足し、明恵の学徳や精神を学ぶとともに、遺跡の保護やその功績を顕彰する活動が行われてきました。歌碑には「糧かひ絶えて 山の東を求むとて わ町へゆかぬ ことぞ悲しき」という明恵上人が故郷で修行した際に詠んだ歌が刻まれています。

